「啾々吟」と「恋情」試論

—— 松本清張の人生観と陽明学の関連から

Yajie CAO (曹雅潔 : PhD student, Kyushu University Graduate School
of Integrated Sciences for Global Society)
✉ sooyaketsu@163.com

(日本)九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程。日本近代文学。『「西郷札」における二つの可能性——〈語り手の破綻〉に着目して』(福岡 : 『近代文学論集』VOL.44, 日本近代文学会九州支部, 2019) 『The two possibilities in Saigosatsu : Focusing on the flaws of the narrator』(KINDAI BUNGAKU ROMANSHU No.44, Fukuoka : Kyushu branch of the association of modern Japanese literature, 2019)、『松本清張初期小説における女性造型——「或る『小倉日記』伝」のふじを事例に』(福岡 : 『近代文学論集』VOL.45, 日本近代文学会九州支部, 2020) 『Female modeling in Matsumoto Seicho's early works : Fuji in *Arukokuranikkiden* as an example』(KINDAI BUNGAKU ROMANSHU No.45, Fukuoka : Kyushu branch of the association of modern Japanese literature, 2020) など。

On *Syusyugin* and *Renjyo* : The Connection between Matsumoto Seicho's View of Life and Yomeigaku

Rather than treating Matsumoto Seicho's short novels *Syusyugin* and *Renjyo* as discrete works, this paper seeks to identify the internal connections between the them. The purpose of this paper is to reconsider the author's view of life, which is the root of *Syusyugin* and *Renjyo*. The title of *Syusyugin* is derived from the Chinese philosopher Wang Yangming's poem of the same name. It is presumed that Matsumoto Seicho was in some way an adherent of the Neo-Confucian Yomeigaku school, and the re-reading of *Syusyugin* and *Renjyo* in terms of their connection with Yomeigaku is the approach of this paper. Seicho presented his view of life, which had much in common with that of Wang Yangming, in *Syusyugin*. Kamon had a tragic end because he acted in a way that was contrary to the implication of the poem *Syusyugin*. The need to conceal the inside of "Yo", and to adopt a position from which to survey Kamon's life, call for a first-person narration by "Yo". As a result, "Yo"'s success is not because he embodies the essence of the poem *Syusyugin*. Seicho conveys his view of life in *Renjyo* from the front, a feat which he could not achieve through the depiction of Kamon's life. "Myself" abandons his greed, "obeys intent", and adopts a "waiting" posture. And so, he feels peace for the rest of his life.

Keywords *Syusyugin*(「啾々吟」), *Renjyo*(「恋情」), Yomeigaku(陽明学), View of Life(人生観), Fate(宿命)

1 はじめに

松本清張が「或る『小倉日記』伝」(『三田文学』、1952年9月)とほぼ同じ時期に書いた小説に「啾々吟」(『オール讀物』、1953年3月)がある。周知のように前者は第二回芥川賞を受賞し、清張の華々しい作家生活の幕開けとなったデビュー作である。一方、後者は第一回オール新人杯の候補作となり、二席に入選した佳作である。しかし、「啾々吟」は「西郷札」と「或る『小倉日記』伝」とともに、「三作は、作者をして朝日新聞社社員から作家生活に踏みきらせた記念碑的な作品」¹と認められながらも、今日になっても大きく取り上げられ、繰り返し論じられている「或る『小倉日記』伝」に比べ、作品に関する論考はわずかである。

「啾々吟」の本格的な作品論は石川巧「〈土族〉の矜持——松本清張「啾々吟」論」(『松本清張研究』(14)、北九州市立松本清張記念館、2013年3月)一本のみである。その他の研究書の言及では、「啾々吟」に関する記述は大体二種類に分けられる。あらすじを紹介するものと、作者の人間観を簡潔に抽出するものである。前者の例として、「力がありながら、低い身分の出であったため、明治新政府の権力の座に連なることができず、ついには警察の密偵となる男の悲劇を描いた」²という記述が挙げられる。後者に関しては、「作品の根底を流れるものは、空しく才能を朽ちさせるしかなかった一人の男の、歯ぎしりさえ聞こえてくるかのような「宿命」の嘆きであった」³といった見解が代表的である。

ところで、「自分は恋愛小説だけは書いたことがない」と述べているにも関わらず、清張は「恋情」(原題「孤情」、『小説公園』、1955年1月)という、タイトル通りの恋物語を書いている。清張作品としては些か風変わりな「恋情」は、従来論者の視野に入って来なかった。管見の範囲では、「恋情」に描かれたストーリーに関する記述に関しては、「人生を支える感情が象徴的に描かれ、嘆息するような純粋性がある」⁴という言及があるのみである。ほかに、清張初期作品の主人公に「不遇・不運・敗れ」のパターンが多いことを踏まえ、「恋情」は「変革期の社会の波にうまく乗りながら、栄達の道をすすむものとの対比において、みずから敗れさるような主人公」⁵の物語であるという主人公の悲劇に注目した見解が見られる。

「啾々吟」という作品を単一のストーリーとして扱うのではなく、二年後に発表された「恋情」との内的な繋がりを見出すことが本稿の論考の基礎であり、上記の先行論を踏まえ、両作品の根底に流れている作家の人生観を再検討することが本稿の目的である。

1 森信勝編『平野謙 松本清張探求』(同時代社、2003)、p.30.

2 権田万治『松本清張——時代の闇を見つめた作家』(文藝春秋、2009)、p.49.

3 田村栄『松本清張——その人生と文学』(啓隆閣新社、1976)、p.49.

4 加納重文『砂漠の海——清張文学の世界』(和泉書院、2008)、p.14.

5 注1に同じ、p.23.

2 「啾々吟」と「恋情」との内的関連

本稿は「啾々吟」と「恋情」の内的な繋がりを基礎とする以上、まず両作品の異同を比較しなければならない。

「啾々吟」は同年同月同日に生まれた鍋島藩主の嫡男、家老の息子、御徒衆のせがれの三人の対照的な人生を、家老の子である「予」の視点で語っている。徒衆の子である嘉門は才能を持ちながら、人に相容れない性格である。嘉門は「予」と仲がよかったが、好意を寄せる千恵が「予」と結婚したことを知り、「雑草にも性根がある」⁶と「予」に手紙を寄せ、脱藩し、消息不明になる。明治維新後、「予」は大隈重信の推薦で、四年間イギリスへ留学し、民政と法律を学ぶ。帰国後、大隈はすでに政変で政府を逐われていたが、「予」は司法少丞に就任する。だが、嘉門の行方が気になり、千恵が自分の許婚であることを早めに嘉門に伝えなかったことを後悔し、彼の不運の責任の半分が自分にあると感じる。嘉門は「谷山輝文」という筆名で自由党の論客となっており、著書と新聞で自由平等を唱え、「予」を大隈を裏切った政府の走狗だと批判する。その後、「予」は政府の密偵となった嘉門と一度会う。だが、間もなく嘉門が密偵をつとめていることが発覚し、自由党員に殺される。その経緯を「予」は裁判記録で読んで、物語を閉じる。

一方、「恋情」の主人公「己」は小藩主の長男として生まれた。本家の山名包幸は、藩士が新政府に疎まれ、登用されないことに不満で、薩長新政府をしばしば罵倒する。包幸には美貌の娘律子があり、「己」は律子に恋慕している。「己」は包幸が、渡欧費を出して「己」にイギリス留学をさせようとしていることを知り、それを箔を付けさせてから娘を嫁がせる心づもりと勘違いして、疑わずにイギリスに向かう。しかし、イギリスで「己」は律子が東山科宮家に嫁いだことを新聞で読み、茫然自失する。放蕩の留学を終え、日本に戻った「己」は包幸が娘の結婚で新政府に重用されたことを知った。律子を権力に奪われた「己」は、行儀見習いに来た旧藩士の娘篠を、国元に寺田という許婚者がいると知りつつも、権妻にしようとする。だが、篠の父の感激した様子と寺田の「己」を殺そうとする勇気を見て、諦める。「己」は律子の結婚生活の不幸を知ってから、彼女を救おうと思い、旧自由党員の手を借り、宮を死なせようとするが、怯懦から思いとどまる。種々の思いに苦しんだあげく、「己」は心の平穏を得る。一生、律子が宮を失って復讐する日を待つことにする。

物語内容から分かるように、「啾々吟」と「恋情」とは関連する点が少なくとも四つ挙げられる。

一つは時代設定である。両作の時代背景はいずれも明治維新・新旧交代という変革期に設定されている。しかし、時代背景を細かく見れば、「啾々吟」では自由民権運動の高揚した明治10年代が主な舞台であり、政府が密偵を起用し、自由党を鎮圧しようとする

⁶ 松本清張『松本清張全集』(三五)(文藝春秋、1972)、p.103。本稿で引用する「啾々吟」「恋情」本文は全て『松本清張全集』(三五)による。以下のテキスト引用は頁数だけ示す。

のに対して、「恋情」では国会開設に伴い、自由党が解散し、自由民権運動が下火になった明治20年代を主な背景としている。両作の物語内容、特に後者は自由民権運動とそれほど関連がないにも拘わらず、清張は紙幅を惜しまずに自由民権運動の高揚と凋落について細かく記述している。この観点から見れば、「恋情」における物語の展開は「啾々吟」の延長線上にあると言えよう。だとすれば、松本清張は「恋情」を執筆するにあたって、「啾々吟」を念頭に置いていた可能性が高いと考えられる。

もう一つは一人称の語り手「予」と「己」の家柄と経歴である。清張初期小説によく登場する下積みの主人公と違い、「予」は家老の息子である。物語に登場する主要人物の身分に於て、上には藩主の嫡男直大があり、下には徒衆のせがれ嘉門がある。同じように、「己」は田舎の支藩の藩主の長男である。上には本家包幸一家があり、下には牧野、寺田など国元の家老や旧藩士がある。そして、「予」と「己」はともに明治10年代にイギリスへ法律の勉強のために長期間留学した経歴を持っている。帰朝後は、二人とも世論の注目を浴び、新聞に取り上げられる。

三つ目は恋愛である。「恋情」に関しては、「己」の恋、失恋、心の葛藤と諦観をめぐるストーリーに主眼が置かれている。「啾々吟」の場合は、「自由民権運動の闘士がスパイに転落してゆく過程を主題にしながら、その主題に運命的な恋愛をまつわせた」⁷と平野謙が指摘しているように、恋愛そのものは主題ではないが、ストーリーを進める大きな要因であり、「予」の心象を把握する上でも看過できない。そのため、恋愛という要素も両作に共通するものである。

最後に、「恋情」は「己」が『後見草』で鍋島藩坂田常右衛門夫婦の事を読んで悟りを得るという筋書きである。実際は、坂田常右衛門夫婦の事を記録したのは『後見草』ではなく、『譚海』であり、作者が常右衛門夫婦の事を記したのは「親孝行と婦貞婦徳」を鼓吹するためである。しかし、松本清張はこの物語を転記する際、「孝行」と「婦徳」という要素を取って排除した。「待つ」行為だけを強調し、「己」に悟らせた。そこには、「啾々吟」の根底に流れる清張の人生観との関連が見られる(それについては次節以降詳述する)。さらに、鍋島藩のこの出来事は「啾々吟」の主人公の出身地を連想させる。

以上見てきたように、両作は関連するところが多く、清張は「恋情」の創作にあたって、「啾々吟」を意識して書いたと考えられる。一見すると、「恋情」の「己」は「啾々吟」の「予」との類似点を多く持ち、両者は同様の人物に見えるが、実際はむしろ、「己」は嘉門と似ているのではなかろうか。恋と出世において、「予」は成功者であり、「己」が嘉門と同じく敗北者であることを別にして、「己」と嘉門の行為・心象に於いても共通するところは多いと考える。

まず、「予」は一人称の語り手でありながらも、自分の心象をあまり語らない。物語の序盤に於いては、もっぱら嘉門に語らせる。嘉門は同僚から孤立した時、「皆は俺を相手にせんようじゃ。だから俺も皆を相手にせんよ」(100頁)と憤懣を吐き、蓮池の叔父

⁷ 平野謙『平野謙全集』(九)(新潮社、1975)、p.215.

に訪ねて帰った時、「今日は愉快だった」(101頁)と満足そうに語り、一人で蓮池の叔父を訪ねないように注意された時、「俺は、千恵さんがすきなのだ」(102頁)と恋心を打ち明ける。「予」が家老職を継ぐと聞いた時、「おめでとう。やはり、門地、家柄には敵わぬな。しかし貴公では腹は立たぬ。祝ってよいことだ」(103頁)と祝いの手紙を書き、「予」と千恵の結婚を知ると、「あれほど信じていた君からでさえ、このような目にあわされた」(103頁)と怒りを隠さない。中盤に入ってから、嘉門は消息不明となるため、その内面は語られないが、「予」は嘉門の運命について推測を加える。物語全般を見ると、もっとも描かれるはずの、一人称の語り手である「予」自身の行動・内面が隠蔽されている⁸。このような語り方は明らかに「恋情」の「己」と違う。「恋情」では、律子に寄せる思い、渡欧する前の喜び、留学先の失意、帰朝後の頹廃など、「己」の内面が仔細に描かれている。この心情表明の様相から言えば、「己」は嘉門と同じ位相にいる。

次に、主従関係に関する「己」と嘉門の態度も共通している。「従」である嘉門は「輕輩の子は輕輩か」(99頁)と不平を言う。「主」である「己」は、篠を権妻にすると言えば、篠の父が抗議にくると思っていた。しかし、主従関係に忠実な老人が礼を言ったことに「己」は驚く。さらに、「従」の寺田に襲われた時は微笑み、この青年の「不忠」な行動を褒めようとする。「己」は「不忠とは何だ」(279頁)と述べ、主従関係に対する嫌悪の念を表している。二人の主従関係への嫌悪は、それぞれの「主」に対する態度からも窺える。嘉門は新政府の官職に就いた「予」のことを、「自己保身の為、その仇敵たる薩長に屈し、走狗と為りたるは、何たる破廉恥漢ぞや」(107頁)と罵り、「己」は包幸に関し、「この男を見るたびに輕蔑が増し、「井藤伯を罵倒したのに、一朝にして口をぬぐって、その走狗となる。変節というは当たらぬ」(269頁)と貶す。一方、「予」は三人同日に生まれたことを「前世から主従の因縁が深い」(97頁)と主従関係を安易に受け入れ、「予と石内嘉門との因縁は、こうして生まれながらにしてすでに生じていた」(97頁)と語る。

最後に、明治変革期という社会背景のもと、「己」は家柄・経歴が「予」と似ているが、帰朝後の交友範囲はむしろ嘉門に似通っている。政府に登用され、重役との交渉を行う「予」とは逆に、「己」は「終日書齋に閉じこもっていた。…外出も減多にしな」(270頁)い。人に相容れない嘉門と同様に孤独である。さらに、「己」は朝野新聞に書いた「民権政治論」と「巴里コンミュニスム革命論」によって、新論客に仕立てられ、「華胄界からは異端視されるようになる」(274頁)る。嘉門が政府攻撃の文章と「予」への批判、及び著書『民権弁解』で、論客として自由党内に認められたのと同様である。「己」と嘉門の身の回りに

⁸ 「予」の心象描写が全くないとは言えない。だが、「予の罪とはいわぬまでも、過誤であった」(103頁)、「その暗い運命の一半の責任は、予にもあるような気がした」(104頁)といった反省意識や、「彼の骨髄からの恨みがこもっている」(108頁)、「予は、これで彼自身が自己のどうにもならない性格的な運命に敗北したことを知った」(116頁)といった嘉門に対する評価が大半を占める。つまり、嘉門の失敗に関して、逐一推測や評価を行なっているのに対し、自身の成功に関する行為・内面が隠蔽されている。ただ、「この頃から予の割に順調な経歴ははじまった」(104頁)と一言で記述している。勿論、このような語り方だからこそ、嘉門が物語の主人公に近い立ち位置を得るのだが、重要なのは、語り手の意識的な隠蔽自体が何を意味しているのかということである。それについては後述する。

は(旧)自由党員が集まる。しかし、「己」は自由党に同情し、自由民権運動のため文章を書いたのではなく、「私怨より出た藩閥への憎悪からである」(274頁)。では、嘉門はどうであろう。嘉門がどれほどの熱意を持って自由民権運動に参加したかを知る由はないが、少なくとも、思慕した少女を奪った「予」に対する憎しみは抱いていたであろう。「自分に冷たくなった党への不満」(113頁)から政府の密偵をつとめることから、嘉門が自由民権運動にさほどの熱意を持っているとは考えられない。

「啾々吟」と「恋情」のストーリーと語り方において、「予」と「己」は似ても似つかない。それに対して、嘉門と「己」の描き方は類似している。一方、「己」と嘉門とは待ち受ける運命が明らかに異なる。その意味で、「己」は別の生き方をしている嘉門と解釈できる。そして、生き方を変えたからこそ、嘉門のような悲惨な死を免れた。この点については後述する。

いずれにせよ、「啾々吟」と「恋情」は紛れもなく一人称で語られた恋に纏わる物語である。社会の暗黒面を抉り出す客観小説が創作の多数を占める清張作品の中で、この両作は物語内容も語り方も異色である。両作の特異性と上記のような内的関連性から見れば、「啾々吟」と「恋情」を単一の作品ではなく、ともに取り上げて検討する余地がある。

3 「啾々吟」に語られた宿命

再び「啾々吟」と「恋情」の時代設定を振り返ってみると、それは下級武士が階級の躍進を遂げ、維新の元勳となった者も少なくない変革期である。そうした時代背景を持つ「啾々吟」において、清張は嘉門を通じて「軽輩の子は軽輩」という「宿命」を繰り返し強調する。見ようによっては時代への逆行と言わざるを得ないが、こうした「宿命」を読む読み方は、先の評価に見るように「啾々吟」につきまとう。歴史に埋もれた人々に注目し、いくら努力しても報われない宿命的なものを清張が描くことは、「断碑」や「菊枕」に先立ち、「啾々吟」からすでに始まっていると言えよう。「宿命」とは、「啾々吟」が言及される度に必ず現れる言葉となっている⁹。以下、「宿命」が作中にどのように語られているのかを確認しておこう。

前述したが、「啾々吟」は一人称の語り手が自己を徹底して隠蔽し、嘉門だけに推測を加える。嘉門の「宿命」は、語り手「予」によって意味付けられる構造になっている。

「予」は、父から、草場佩川が嘉門を「あれは可愛気のない子です」と言ったことを聞くが、この「あれは可愛気のない男だ」という評は、作中で二度も繰り返される(100頁、114頁)。こうして嘉門の可愛気なさを読者に印象づける一方で、「予」は、嘉門が人と相容れないことを不思議に思う。嘉門を「狷介というほどではない。むしろ人のよい男」

⁹ 例えば、作品の主題を「先天的な運命を背負った主人公たちが、明治維新という社会的動乱を通過することによって、宿命的な明暗を対照づけるにいたった全過程が追及されているもの」と把握する平野説(前掲, p.215)が挙げられる。

(100頁)と思い、「欠点も落度もあるわけではない」(117頁)と考える。「可愛気のない男」と繰り返す一方で「欠点も落度もない男」であるという「予」の語りは、嘉門に関する認識の矛盾を生じさせる。「可愛気のない男」という発言の反復によって一般的な嘉門評を印象づけながら、「欠点も落度もない男」という「予」の戸惑いを繰り返し強調することで、読者のまなざしを「予」に近づけながら、嘉門の生涯に付きまとう「宿命的な性格」を成立させている。この「宿命」についても、「予」は「宿命」「宿命的な性格」という言葉を嘉門に用い、「宿命的な性格をもっている」(100頁)、「嘉門の宿命的な性格は…」(104頁)、「他人に終生容れられない宿命だった」(117頁)などと反復して強調する。

つまり、「宿命」や人間営為の虚しさを読む評価は、読者が「啾々吟」を読んで痛切に感じるものという以前に、「予」が作中で執拗に「宿命」の語彙を反復することによる。一方、ほぼ同時期に書かれた「或る『小倉日記』伝」では「宿命」という言葉は一度も出ないが、人間の努力の空しさが読者に伝わる。さらに、モデルである田上耕作の病気を先天的な障害に改変したのも「宿命」という作家の思いが込められていると考えられる。両作のこうした相違には一見して、芥川賞受賞作との筆力の差があるようにも思われるが、「啾々吟」は清張が「せいいっぱい書いた」¹⁰と自負する作品であり、そのように簡単に結論づけることは出来ない。

「或る『小倉日記』伝」は三人称で語られるため、客観的な視線で人物・行為を捉えられるのに対し、「啾々吟」では嘉門の物語を「予」が一人称で主観的に語るという策略が取られている。破滅の「宿命」を同情しつつ語る「予」は、ある意味で嘉門とは対照的である。「予」は自身の行動や内面に関しては極力語らないが、士族の没落も多かった維新時代に、「予」が順調に出世したことは、「順調な経歴がはじまった」(104頁)と示されている。こうした「予」の設定には、どういう意図や効果があるだろうか。「予」を設定することで不都合も生じる。嘉門が草場先生の塾に出入りする前後の記述は、「予」の見聞の範囲外となる。語りの原則を逸脱し、作品全体でも語りの視点が微妙な箇所になっている¹¹。こうした事を記述するには、「或る『小倉日記』伝」と同じく三人称の語りで、あるいは嘉門視点の一人称の語りでストーリーを進めるのが相応しいはずであるが、清張は、なぜ家老の息子の「予」を語り手に選び、嘉門の「宿命」を語らせたのであろうか。それを考えるために、あらためて「予」と嘉門の関係について確認したい。

藩主の後継ぎと「予」と嘉門の三人が、同年同月同日に生まれたことを、「予」は「前世から主従の由縁が深い」(97頁)ことの証拠と語る。それは「予」と嘉門の紐帯となり、「予」が嘉門に向ける眼差しを規定している。藩主後継に対しては、「予」も嘉門も主従関係の従となる。一方で、藩主後継に対しては従である「予」も、嘉門に対しては家格の違いから主従関係の主の要素を含む。つまり、藩主後継は常に主、「予」は従と主を含み、嘉門は常に従ということになる。三人が同年同月同日に生まれたという設定は、そのことで

¹⁰ 松本清張「あとがき」(『松本清張全集』(三五)文藝春秋、1972)、p.522.

¹¹ この点に関して、すでに石川巧(前掲)による指摘があるが、詳しく説明されなかった。

祝福される一方で、上記のような関係性を持つことの皮肉や残酷さを導入する仕掛けになっている。藩主後継に対し、ともに従の存在として同じように祝福された「予」と嘉門は、家格の違いから主従の関係性を常に潜ませている。作中には、「予は嘉門の才智に感心する一面、彼が低い家格に生まれたことに同情せずにはおられなかった」(99頁)とある。また、「予は、嘉門が周囲に入れられず、常に孤独であるのに同情していた。その同情者である予が、図らずに彼の頭上に最後の打撃を与えたことになった」(103頁)ともある。高い「家格」にいる「予」は、嘉門の「同情者」として「彼の頭上」にいるのである。このような位置づけから、「予」は、嘉門の生涯を「女房なく、希望も絶えた後は、専ら酒中に自己を没し、虚無の果、密偵にまでなった」(117頁)と評する。その発端が「女房なく」ということに由来し、その「女房なく」という出来事が、「予」と嘉門との主従的な関係性から生じているとすれば、嘉門の「宿命」には「予」も深く関わるはずだが、「予」は彼の悲劇を「宿命的な性格」に由来すると慨嘆するだけである。嘉門が死に至るまで、「予」は「主」である立場を貫き、「従」の嘉門に同情を寄せながら、見下ろす眼差しで嘉門の生涯を追っていく。嘉門の「宿命」は、そうした「予」の視線によって紡がれた、きわめて陰影に富む「宿命」である。

同じ時期に書かれた「或る『小倉日記』伝」においては、清張は上から人間を描かないという語りの姿勢を貫いたが、それとは逆に、「啾々吟」に於いては、「予」の語りには上から見下ろす視線が暗黙裡に含まれている。そのため、清張は嘉門の物語を「予」に語らせる理由は、少なくとも二点があると考ええる。「予」の行動・内面を語らずに済ませる点と、嘉門へから見下ろしの視線が描出できる点である。

「宿命」の陰影を別の観点から考えてみよう。「啾々吟」というタイトルは、「人生命に達すれば自ら灑落、讒を憂ひ毀を避けて徒らに啾啾せんや」¹²という王陽明の同名詩に由来する。「啾々」とは寂しげに鳴く声を指し、嘉門の孤独な生涯をなぞらえたものとして理解できよう。詩には「千金の珠 鳥雀を弾たんや、土を掘るに何ぞ煩はさん鋤鏝を用ふるを」という句もあり、「無用な手段は取らない」ことを意味する。詩「啾々吟」が伝えるのは「天意に従う」という思想である。「宿命的な性格」に囚われ、運命に抵抗し、悲惨な死に見舞われた嘉門と相反するような人生観である。同名詩との関連性については、すでに石川氏(前掲)が指摘している。

天意に従えば自ずと道は開けるのだから、自分が採用されれば大いに実行に移して世のために働こう。もし採用されないのであれば、時期が来るまで休養して英気を養おう。大きく高く自らを重んじて軽々しく動かず、日頃自らを磨き高めるべきだ。

石川氏は詩「啾々吟」を以上のように解釈している。そして、「自らを好み、思ったこ

¹² 王陽明『王陽明全集』(六)(明徳出版社、1982)、p.468.

とをすぐ行動に移そうとする…自分が求めていたはずの相手から拒絶されてしまう嘉門」とは対照的に、「予」を「歪んだ出世欲に染まることも他者の栄達を僻むこともなく育って来た」と位置付けている。さらに、「予」は時代の勢力に靡かず、詩「啾々吟」の真髓を実践したため成功したと主張している。

「啾々吟」論としてタイトルの由来に焦点を当て意義深い、疑問も残る。一つは、前述したように、「予」の語りには自己の行為・内面を隠す一面もあるので、「予」が果たして時代の権勢に靡かず、「啾々吟」で唱えた人生態度を持ち続けたかどうかという判断自体を下しにくいということである。もう一つは、石川氏の「もし採用されないのであれば、時期が来るまで休養して英気を養おう」という解釈である。これは、詩「啾々吟」が伝える意味以上であり、陽明学の学説を拡張敷衍している。しかし、陽明学全般を視野に入れば、主従関係を強く意識し、嘉門を見下ろすような場所から眼差しを注ぐ「予」は、王陽明の主張を実践したとは言えない。だから、「啾々吟」というタイトルが付けられたのは、嘉門の宿命に抵抗する生き方に対する悲嘆であり、「天意に従う」べき、「無用な手段は取らない」という戒めであるだけだと考える。

では、詩「啾々吟」、あるいは広く言えば陽明学の真の実行とは何であろうか。「恋情」と「啾々吟」とは内的な関連性があり、「恋情」の語り手「己」はある意味で、生き方を変えた嘉門であると第二節で論じてきた。故に、次節は語られる嘉門と語る「己」の生き方を中心に、松本清張の人生観について検討する。

4 「恋情」に語られた陽明学

「恋情」は男女の恋を巡る物語でありながら、作品全体の雰囲気に見るとそぐわない、自由民権運動の様相を記述する。「議員中江兆民は彼等に愛想をつかし、飄然とアルコール中毒と称して議会を去っている」、「旧自由党員が身をなげうち、血を流して取った“議会”に、自由党がこんな有様では彼らの不満となるのも仕方がない」(274頁)などとある。自由民権運動の思想的支えとなったものには王陽明の弟子王艮が発展させた左派陽明学があるという研究がすでになされている¹³。そのうえ、清張は後年の作品にも、陽明学を教える二松學舎の学生であり、自由民権運動の理論的指導者でもある中江兆民をモデルにした評伝小説「火の虚舟」がある。清張が明治維新・自由民権運動に関心を持っていたとすれば、陽明学に関してもある程度の知識を持っていたと推測できる。さらに、大正から昭和戦前期にかけて、王陽明の手紙と言行が記録された『伝習録』が「精神修養の書として読まれたりして」、「数多くの注釈書・現代語訳が著された」¹⁴。松

¹³ 鎌元昌弘「維新の思想を問う 明治維新と陽明学・朱子学：藩政改革と明治維新・自由民権運動」(『日本主義』(41), 白陽社, 2018, pp.59-71.)を参照されたい。

¹⁴ 吉田公平『伝習録——「陽明学」の真髓』(講談社, 1988), p.25.

本清張と「啾々吟」の詩句及び陽明学全般との接点は不明だが、そうした受容の背景は想定されよう。実際、小島毅によれば、「陽明学のメンタリティーは、明治維新や第二次世界大戦を経過しても日本人に残っているとされる」¹⁵。

詩「啾々吟」の故事について確認すれば、一五二〇年、王陽明が地方で閩兵し、戦法を教えていたが、君側に讒言して、皇帝の意を動かし、陽明を失脚しようとした人がいた。陽明の弟子がそれを察し、心配していたが、王陽明は「啾々吟」を謳って答えた。「人事を尽くして天命を俟つのみ。惧れも愁いもない。虚心であってこそ万事に対応できる」¹⁶という旨である。時は四九歳で、死生榮達は「みな一定の命数があって、どうにもならぬことだ」¹⁷という王陽明の思想が大成しつつあった時期である。

王陽明の学説として、まず「天理人欲」という概念が挙げられる。王陽明は「欲」を肉体の欲求だけでなく、人間の「物欲」をも想定していた。それは陽明が生活していた明の時代状況と関わっている。当時、社会経済が発達し、消費時代が到来したため、「人々は生活必需品以外のモノへの物欲を刺激される」¹⁸ようになった。王陽明の「存天理去人欲」思想は「限度を知らず肥大化する物欲を制御することで社会に再び調和を取り戻そうとする」¹⁹ことに出発したと考えられる。

人の心は初めから天の如く、淵のように、無限なものである。心の本体はあらゆるものをつつまないことがないから、本来天と同じであるが、ただ私欲に妨げられるために、天に等しい本来の姿が失われてしまうのである。また心のもつ理は無限のものであるから、淵とおなじことであるが、ただ私欲に塞がれるために、淵に等しい本来の姿がなくなるのである。（『伝習録』、429-430頁）

明治時代の「私欲」と言えば、「啾々吟」と「恋情」とも関係する立身出世志向の問題がある。「啾々吟」では、嘉門の功名心と出世欲が「予」の語りによって強調されている。たとえば「これを機会に伴に出世の望みをかけたであろう。予は初めて嘉門が城中に上がった時、その顔が、こまちゃくれて、伶俐そうなのを、いくぶん反撥をもって眺めたのを憶えている」(97頁)とある。「予」の「反撥」は、その「伶俐そうな」顔に「出世の望み」が見えたためであろう。ほかに、嘉門が父の跡を継いでお徒衆になった時、「不平であった。もっと榮進を期待していた」(99頁)とある。こうした「立身出世」への嘉門の志向は、政府の密偵になり、自分を国土として認めて貰おうとするまでに至る。

嘉門の姿は、「学問を立身出世の手段とする人々に非常に鋭い批判を投げ」²⁰、功利的

¹⁵ 小島毅『朱子学と陽明学』（ちくま学芸文庫、2013）、p.196。

¹⁶ 中村宏「解説」『王陽明全集』（六）（明德出版社、1982）、p.81。

¹⁷ 近藤康信『〈新釈漢文大系十三〉伝習録』（明治書院、1979）、p.219。以下書名『伝習録』と頁数だけ示す。

¹⁸ 注15に同じ、p.118。

¹⁹ 注15に同じ、p.118。

²⁰ 岡田武彦『現代の陽明学』（明德出版社、1992）、p.194。

な考えを持って行動してはいけなと説いた陽明思想とは対立する。小説は、頭脳明晰で才智がある嘉門の出世欲を描く一方、その挫折と破滅を描く。その構造は、「啾々吟」に限らず、「断碑」をはじめ、ほかの清張作品にも通じる。とするなら、清張による王陽明「啾々吟」と陽明思想の受容という問題は、小説「啾々吟」だけに留まる問題ではない。清張の小説に見られる人生観は、「工夫は如何に多岐にわたろうとも、結局わが良知の働きによるものでなければ、対立と葛藤の矛盾を全面的に解消することができず、統体を失して支離に陥るのを免れ難い」²¹という陽明思想と通じている。

嘉門の〈功利的功名心と人に容れられない境地〉の並列は、「朋友には信ならしめ」「功利の競争がなかった」(『伝習録』、260頁)という王陽明の主張といかにも皮肉的に対置される。

もし欲望に動き私心に蔽われて、利害のために争い、怒りの感情に激しあうようになると、物を破壊したり、同類で傷つけあったりして、どんな非道なことでもしかねないのである。(『伝習録』、576頁)

陽明思想に従って考えれば、嘉門の悲劇は出世欲と怒りの感情に刺激され、脱藩した時期からすでに規定されたと考える。一方、「恋情」の「己」は嘉門のような悲惨な運命を免れる。律子が結婚するニュースを新聞で読んだ「己」は、海辺に走り、荒涼とした風景を眺めた末、「模糊たる功名心は跡かたもなく消え」(267頁)る。留学を終え、日本に戻っても、官途に就かず、終日書齋に閉じこもる。つまり、「己」は嘉門とは逆に、完全に出世欲を棄て、功利的な思考を脱した。嘉門と相反する行動をとり、陽明思想に従い行動したのは「予」であると石川氏は述べるが、「啾々吟」と「恋情」との関連性を考慮に入れば、「己」こそが嘉門と対照的に位置付けられているように思われる。

「山中の賊を破るは易しく、心中の賊を破るは難し」という王陽明の言葉が示しているように、私欲の克服は困難である。この場合、「格物致知」の必要性が唱えられる。「知」とは良知であり、人間の自然の本能である。王陽明は良知が「凡愚のものも聖人も同じである。ただ聖人はその良知を充分に発見するが、凡愚のものは発見し得ない。そこに聖人・愚人の分れる原因がある」(『伝習録』、240頁)と説明したうえで、良知の発見を妨害するものが私欲であることを主張した。私欲を排除するため、常に静坐澄心し、心を正す(正心)べきである。心を正すことこそ、良知を致す(致知)ことの修行であると唱えた。

「予」に裏切られたと感じた嘉門は脱藩し、「予」とは消息不通となる。「予」は、「三人同日に生まれながら、一番不当な扱いをうけた彼の骨髄からの恨みがこもっている」と嘉門の心象を付度し、さらに嘉門が「予」に抱いている遺恨は骨身に徹している(108頁)と恨みが嘉門の心を歪めていると判断する。嘉門の行動から見れば、決して心を正して

²¹ 注20に同じ、p.224.

私欲を棄てたとは言えないが、「予」についても問題がないわけではない。「生活の不幸と荒涼」(114頁)、「終生他人に容れられない」(117頁)と嘉門を推測する「予」の尊大さと前節で確認した自己内面の隠蔽から考えれば、「予」は必ずしも心を正して、良知が本来性(聖人も凡人も同じくもっている本来の良知)に復歸したとも言えない。さらに、前述したように、「予」の記述は、陽明学が唱える「満街聖人」(誰でも聖人である)説とは逆に、「予」の嘉門への見下ろしの視線を明瞭に表わしている。「予」の語り(記述)には自己修行して、自分自身を聖人に近い人格を立て、為政者として民衆を見下ろし、教育感化する倫理がある。

一方、「恋情」に於いては、ストーリーの中盤から、専ら「己」が良知復歸の体現者となっていく。「己」は帰朝後、「本を読んだり、ぼんやり考えたりして日を送り、外出も減多にできなかった」(270頁)と自分自身の行動を語る。自分を襲ったのは篠の許婚者である寺田と知り、「あの若者の肩を叩いて勇を褒めてやりたい」(273頁)と思い、自己の怯懦を意識する。律子の不幸な結婚を知り、彼女を救いたいという意志を持つが、自分の無力さに絶望する。宮が死ねば律子が復籍できると分かり、宮を死なせようと企てるが、怯懦のために寺田のような勇気が出ない。密かに宮の戦死を願うが、宮が無事に戦場から戻り、落胆する。結局、「律子を待っているということが、己にとってももっとも生甲斐のあること」(282頁)と悟り、穏やかな日ざしを浴びながら、楽しみに感じる。

以上見て来たように、「恋情」の物語は「己」が実際的な行動をせず、自らが主体となって、常に心的な葛藤をしながら、心の修行を行い、自己を認識し、悟りを達成するという心的過程に還元できる。それは王陽明の提唱した「心を正す」ことであり、「致良知」の態度である。つまり、「環境や日常の事変に翻弄されることなく、動静を超越して修行」し、「あらゆる機会を修行の場と化する」(『伝習録』、12頁)ことを通して、良知が本来性に復歸することができる。特に、「己」の最後の悟りは「理は自分自身の内面にそなわっており、外部に求める必要はない」²²という陽明学の核心に通じるものと言える。「啾々吟」の「予」の見下ろす視線に比べ、「不忠とは何だ」と本音を吐露する「恋情」の「己」は明らかに陽明思想の実践者である。「己」は嘉門と同様の立場に置かれながら、嘉門とは生き方を異にして、出世欲を去り、心を正す修行を実行したからこそ、嘉門のような悲運を免れ、心の平和が得られたのではなかろうか。「啾々吟」と「恋情」とをシリーズとして読めば、心の修行という陽明学の主張が浮上し、清張に描かれた主人公たちの「不幸の真因」が「彼らの心からによる」²³という平野氏の指摘の的確さが、対照的な実例を通して証される。

「存天理去人欲」と「格物致知」が成し遂げられれば、詩「啾々吟」に唱えられた「無用な手段を取らず、天意に従う」という境地まで進められる。

²² 注15に同じ、p.52.

²³ 注1に同じ、p.38.

もし、自己の才能がその仕事に適していたなら、一生涯激職にいても過労とせず、低い地位、煩瑣な仕事にも満足して、自らを賤しむことはなかった。この時代に一般の人は、心から楽しみ和らいで、皆、互いに一家のものの如く親しみ合い、素質が劣って役人になれないものは、農工商賈などの身分に満足し、各自その職業に精を出し、相助けて衣食し、高い地位を望んだり、他の境遇を羨んだりすることはなかった。(『伝習録』、262頁)

自分の地位・境遇に満足すべきだと唱えられた陽明思想である。それに対して、嘉門は生涯、「命数」に抵抗することを止めなかった。「予」と律子の結婚を知った後、嘉門は「予」に「雑草でも性根はある」(103頁)と手紙を寄せ、脱落する。それは嘉門が「輕輩の子は輕輩」という「命数」を知りながら行った最初の抵抗である。「自分に冷たくなった党への不満」(113頁)から、政府の密偵となったのは嘉門の最後の抵抗である。しかし、いくら抵抗しようとしても、嘉門のすべての努力は徒労に終わる。それは嘉門の「宿命的な性格」に起因すると「予」は語っているが、清張が敢えて王陽明の同名詩をタイトルにつけた点から考えれば、嘉門の悲劇は必ずしも人に容れられない性格のせいではなく、「無用な手段を取らず、天意に従う」という詩「啾々吟」の言葉に反した行動を取ったためであろう。

一方、「恋情」では、「己」は律子を救うため、荻野の手の借りて宮を殺し、権力に抵抗しようとするが、結局荻野に頼むことを止める。「己」は自分のことを怯懦だと思い込むが、「天の機会を待つほかはなかった」(280頁)と諦めた「己」の諦念には正に「無用な手段を取らず、天意に従う」という詩「啾々吟」が伝えた陽明思想が宿っているのではないか。

何年か、何十年かわからぬ。その間に己が先方より先に死ぬかもしれぬ。が、そんなことは問題ではなくなった。

律子を待っているということが、己にとってももっとも生甲斐のあることを知った。

秋の静かな日に、おだやかな陽ざしを浴びて、いつか来る人を遠いぼんやりした心で待っているような、しみじみとした愉しさであった。

己は茶を習い始めた。(282頁)

「己」は抵抗を諦めたため、心の安息を取り戻せた。心は夕風のように平静となり、自分のこれからの人生を天意に任せることにする。「恋情」における「己」の「無用な手段を取らず、天意に従う」諦観は、まさに「啾々吟」一篇の底流をなしつつも、清張が伝えきれなかった宿命観である。

松本清張は権力に抵抗しようとしても、悉く失敗に終わる主人公を後の小説にも多く描いている。清張はそれらの主人公の反発に満ちた心象を、「恋情」に語られた「天意に従う」宿命観とは対照的に位置付け、彼等の失敗した人生を語っていったのではなかろうか。

5 結び

王陽明と共通した人生観を、松本清張は「啾々吟」で提示していた。嘉門は詩「啾啾吟」の含蓄と逆な行動をとったため、悲惨な最期を迎えた。「予」の内面を隠蔽する必要性と、嘉門を見下ろす姿勢を提示する必要性という二点から、嘉門と対照的な人生を歩んだ「予」による一人称語りが必要とされる。その結果、「予」は詩「啾々吟」の真髓を実践したため成功した人物でなくなる。「宿命に闘い、失敗に終わった」嘉門の人生で伝えきれなかったものを、清張は「恋情」を以て正面から示した。「己」が私欲を棄て、「天意に従い、心を正す「待つ」行為を取ったため、和やかな心持になる。

そのため、社会階層の転覆や伝記的な物語の構成が十分に可能であった明治変革期という時代を設定しながらも、「抵抗が無駄」であり、「天意を待つ」といった諦観を、「啾々吟」と「恋情」の主人公を通して、対照的に描いているのである。この諦観は松本清張の小説では「幸せ」ではなく、「仕合せ」という表記を使うことから垣間見られる。「運命」、「人間の意図を超えたもの」、「天運のようなもの」の意味合いが強い表記である。

清張は文壇で名を挙げ、恵まれた生活をしていたある日、汚い格好をした三、四人が荷物を積んだトラックに乗っていたのを見た。「いつか自分もそのトラックの上乗りになるべき運命になるかもしれない、という予感を感じた」²⁴と述べ、今の豊かな生活がいつ崩壊するか分からない懸念に襲われた。この回想が示しているように、松本清張の人生観の根底に流れていた陽明学と共通する部分が、氏自身に人生に対しても不安感を覚えさせたと考えられる。

第四節で述べたように、清張による陽明学の受容という問題は本稿で考察した作品だけに留まる問題ではない。それは「啾々吟」以前と以後の清張テキストに繰り返し現れることになる〈運命〉のモチーフや〈敗者〉の造形にも関わっていると考える。さらに、「啾々吟」と「恋情」の時代設定と作品が伝える諦観を立身出世志向と関わらせれば、清張が日本近代における立身出世主義をどう捉えていたか、という問題を検討する余地がある。なお、それらは今後の研究課題として考察していく。

参考文献(Bibliography)

- 王陽明(1982)『王陽明全集』(六)、東京：明德出版社、O, Yomei(1982) *O Yomei Zensyu* (6), Tokyo : Meitokusyuppansha.
- 岡田武彦(1992)『現代の陽明学』、東京：明德出版社、Okada, Takehiko(1992) *Gendaino Yomeigaku*, Tokyo : Meitokusyuppansha.
- 加納重文(2008)『砂漠の海——清張文学の世界』、大阪：和泉書院、Kano, Sigefumi(2008) *Sabakuno Umi : Seichobungakuno Sekai*, Osaka : Waizumisyoin.

²⁴ 松本清張『随筆 黒い手帳』(中央公論社、1961)、p.102.

- 小島毅(2013)『朱子学と陽明学』, 東京: ちくま学芸文庫, Kojima, Tuyoshi(2013) *Syusigaku to Youmeigaku*, Tokyo: Chikumagakugeibunko.
- 近藤康信(1979)『新釈漢文大系13)伝習録』, 東京: 明治書院, Kondo, Yasunobu(1979) *Sinsyaku Kanbun Taikei*, Tokyo: Meijisyoin.
- 権田万治(2009)『松本清張——時代の闇を見つめた作家』, 東京: 文藝春秋, Gonda, Manji(2009) *Matumoto Seicho: Jidainoyamiwo mitumeta sakka*, Tokyo: Bungeisyunjyu.
- 田村栄(1976)『松本清張——その人生と文学』, 東京: 啓隆閣新社, Tamura, Sakae(1976) *Matumoto Secho: Sono Jinsei to Bungaku*, Tokyo: Keiryugakusinsya.
- 雛元昌弘(2018)「維新の思想を問う・明治維新と陽明学・朱子学: 藩政改革と明治維新・自由民権運動」『日本主義』(41), 東京: 白陽社, pp.59-71. Hinamoto, Masahiro(2018) *Isinwo tou: Meijiisin to Yomeigaku. Nihonsyugi Vol.41*, Tokyo: Hakuyosya, pp.59-71.
- 松本清張(1961)『随筆・黒い手帳』, 東京: 中央公論社, Matumoto, seicho(1961) *Zuihitsu: Kuroi Tacya*, Tokyo: Cyuokoronsya.
- 松本清張(1972)『松本清張全集』(三五), 東京: 文藝春秋, Matumoto, Seicho(1972) *Matumoto Seicho Zensyu*(35), Tokyo: Bungeisyunjyu.
- 森信勝(2003)『平野謙・松本清張探求』, 東京: 同時代社, Mori, nobukatu(2003) *Hirano Ken: Matumoto Seicho Tankyu*, Tokyo: Dojidaisha.
- 平野謙(1975)『平野謙全集』(九), 東京: 新潮社, Hirano, Ken(1975) *Hirano Ken Zensyu*(9), Tokyo: Sincosya.
- 吉田公平(1988)『伝習録——「陽明学」の真髄』, 東京: 講談社, Yoshida, Kohei(1988) *Densyuroku: Yomeigakuno Sinzui*, Tokyo: Kodansya.